

【研究余滴】

教職課程の「教科に関する専門的事項」と指導の実際とについて

——高等学校国語科『平家物語』『忠度の都落ち』を例に——

橋 村 勝 明

一、はじめに

中学校及び高等学校の教職課程における「教科に関する科目」は、平成三十一年度から「教科及び教科の指導法に関する科目」に改められ、そこに含めることが必要な事項として、

イ 教科に関する専門的事項

ロ 各教科の指導法（情報機器及び教材の活用を含む）

が示された。ロは旧法においては「教職に関する科目」の「教育課程及び指導法に関する科目」に含まれていた内容で、「教職生活の全体を通じて教員の資質能力の総合的な向上方策について」（中央教育審議会答申、平成二四年八月二八日）において示された、

・「教科に関する専門的理解」を十分身に付ける。この際、教科の実際に即した内容とするため、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」を架橋する内容を展開する。

（10頁）

を制度上推進してゆくものであると理解できる。

以前同答申をうけて、「教科に関する科目」を指導場面と関連づけられるように講義内容を見直し、「教科に関する科目」と「教職に関する科目」とを架橋する内容について」（『広島文教女子大学教職センター年報』第1号、二〇一三年二月）として公表した。これは、中学校教員養成課程の科目について、授業計画上架橋する内容への改善を試みたものであった。一方で、中学校及び高等学校の教員養成課程においては、授業内容が小学校教員養成課程に比して専門的であるために、大学の教職課程における「教科に関する専門的事項」が、実際の指導場面とどのように関連するかが、学生に意識されにくいのではないかと考える。

そこで、中学校および高等学校の教員養成課程の科目として広島文教大学教育学部において開設している「日本語の歴史」の内容が、教材に対する理解に如何に関わるのかということについて、高等学校国語科の教材である『平家物語』の指導場面を想定しつつ検討をしたい。

稿者が担当をする2年生後期開講科目である「日本語の歴史」（二〇二四年度後期）の授業計画は以下の通りである。

テーマ

キーワード

第1回 日本語史概説

時代区分、研究領域

第2回 奈良時代の資料

万葉集、古事記、日本書紀

第3回 奈良時代の日本語

上代特殊仮名遣い、母音調和

第4回 平安時代前中期の資料

東大寺諷誦文稿、有年申文

第5回 平安時代前中期の日本語

ハ行転呼、唇内撥音と舌内撥音

第6回 平安時代後期の資料

源氏物語、御堂関白記

第7回 平安時代後期の日本語

歴史的仮名遣い、和文体と漢文訓読体

第8回 院政鎌倉時代の資料

類聚名義抄、平家物語

第9回 院政鎌倉時代の日本語

二段動詞の一段化、係り結びの衰退

第10回 室町時代の資料

キリシタン資料、抄物、狂言台本、節用集

第11回 室町時代の日本語

四つ仮名、連声

第12回 江戸時代の資料

和字正濫鈔、醒睡笑

第13回 江戸時代の日本語

上方語と江戸語、ハ行子音

第14回 明治時代の資料と日本語

和英語林集成、言文一致

第15回 まとめ

日本語史と関係学間領域

科目全体を通じた配慮としては、大学において日本語史を修めるに際して必要な事項を取り扱うこと、日本語の歴史全体を通じた内容であること、「資料」と「事項」とのバランスが適切であることとしている。

二、日本語史と教材『平家物語』

右に掲げた授業計画と国語教科書教材とがどのように関わるのかということについて、確認をしてゆきたい。なお、資料としての『平家物語』及び日本語史上の事項については、それぞれの専門書を参照して頂

二

き、本稿では大学における講義と教材との関係を指摘するに留める。ここで取り上げる教材は、『高等学校 古典探求 古文編』（第一学習社、二〇二三年二月発行）に掲載されている「忠度の都落ち」とする。『平家物語』については、授業計画では第8回で取り上げることとしているが、教科書に掲載されている資料を盛り込もうと意図しているのではない。さて、教材としての『平家物語』を講義内容に結びつけようとする次のようになる。研究領域とキーワードの例を示した後に、教材の該当箇所内の一部を、傍線を付して提示する。丸括弧内は、教科書中の用例の所在を示す。

「文法」 係り結び

勅勘の人なれば、名字をbはあらはされず、故郷の花といふ題にてよまれたりける歌一首ぞ、「よみ人しらず」と入れられける。

(一〇九三)

「語彙」 和文語・漢文訓読語

俊成卿、「さる」ことあるらん。その人ならば苦しかるまじ。入れ申せ。」とて、門を開けて対面あり。(一〇六六)

この二、三年は、京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかながら当家の身の上のことに候ふ間、

(一〇七三)

「文体」 和漢混淆文

別の子細候はず。三位殿に申すべきことあつて忠度が帰り参つて候ふ。

(一〇六五)

この二、三年は、京都の騒ぎ、国々の乱れ、しかながら当家の身の上のことに候ふ間、疎略を存ぜずといへども、常に参り寄

ることも候はず。

(二〇七四)

〔音韻〕 促音便・連声・ハ行転呼

侍 さぶらひ

五騎、童一人、わが身ともに七騎取つて返し、五条の三位 さんみ

俊成卿の宿所にておはして見給へば、門戸を閉じて開かず。

(二〇六二)

〔表記〕 促音便の「つ」表記

三位殿に申すべきことあつて、忠度が帰り参つて候ふ。

(二〇六五)

文法については、教材中に係り結びの用例があるが、講義に於いては第9回で係り結びが衰退して行くことを取り上げており、早くは『平家物語』成立頃に生じている。そのような変化のある中で用例であることを認識していただきたい。語彙については、次の文体とも関わるが、和文語と漢文訓読語が混淆しており、第7回の和文体と漢文訓読体のそれぞれにおいて用いられた語彙がみられる。和漢混淆文は、平安時代和文に比して漢語や漢文訓読語が多く用いられる部分にその特質がある。音韻については、右に掲げたほか教科書中にはイ音便、ウ音便もみえる。ハ行転呼については第5回で取り扱っているが、後の時代に成立した資料であれば、当然関わることとなる。促音の「つ」表記については、早くは院政期頃、一般化されるのは鎌倉時代とされている¹が、注釈書では次に掲げるように、片仮名「ツ」の小書きを

補って表記している²。

三位殿に申べき事あつて、忠度がかへりまひて候。

(下二〇三二)

更に、注釈書が底本とする高野本の影印を確認すると、次のようになっている³。

三位殿に申すべき事あて忠度がかへりまひて候 (二二〇四)

原本では無表記となつているところを注釈書では読者の読みやすさに配慮し、片仮名小書きとしている。つまり、教科書教材の「あつて」「参つて」の「つ」は、促音化しているという事実を踏まえつつ、教科書教材としては「つ」表記を採用したということである。

このように、教材としての『平家物語』は、大学における日本語史の講義内容と関わっていることを意識しつつ指導することが教職課程に求められているのではないか。

他に研究領域としては字形字体があるが、資料については活字化されていることから講義内容と結びつけることは難しい。大学における講義の実際は、高等学校における古文の「ルール」を教えることではなく、資料に見られる言葉の動態を教えることにあると考える。

中学校で教わる古文の「ルール」は、ハ行をワ行で読むこと（実際はヒフヘホについては、ア行のイウエオと生徒に認識されているのではない）、高等学校では活用が異なることが教えられる。特にハ行転呼については、教材を音読する際に注意をする必要があり、中学生に語頭はそ

のままハ行で、語中語尾はワイウエオで読むのであると「ルール」を説明することは簡単で、また理解もしやすいが、実際にはもう一步先の理解が必要である。

例えば、「橋」のハ行音は語頭であるから「ハシ」と理解されるが、「天橋立」の場合はどうか。天橋立を地名として一語と捉えれば語中になり、「アマノワシダテ」となってしまう。助詞「の」を介しているので、橋立のみで捉えようと、語頭となると「ハシダテ」となると説明することはできる。では、「三条大橋」の場合はどうか。三条大橋のほか、四条大橋、五条大橋があるので、語構成としては三条・大橋であり、ハ行音は語中となってしまうが、実際の発音は「オオハシ」である。これらのことから、語中語尾のハ行音をワ行音で読むという説明では覆いきれない部分が残ってしまう。ハ行で読むかワ行で読むかは、語の認定や語構成、語意識に関わるということを指導の際には意識しておかなければならぬであろう。

三、『平家物語』の教材と原本

ここまで、大学における講義と教材との関係についてきわめて簡潔な結ではあるが確認をした。その上で、教材と原本とを比較し、どのような教材化がなされているのかを検討したい。まず、先と同じく「忠度の都落ち」の一部を掲げる。

撰集せんしふのあるべきよし承り候ひしかば、生涯の面目に、一首なりとも御恩をかうぶらうと存じて候ひしに、やがて世の乱れ出て来て、その沙汰なく候ふ条、ただ一身の歎きと存ぞんずする候ふ。

(一〇七八)

右の引用中、「存じて候ひ」のように、助詞「て」を介在するが、連用形「存じ」に「候」が接続しているのは文法書どおり理解できるが、直後に「存ずる候ふ」がある。連体形「存する」に「候」が接続しているのであるが、重要なのは先の「候」に振り仮名はなく、後には「ぞんずら」と振られている部分である。「ぞんずらふ(候)」と「ぞんずらふ(候)」とは接続が異なる。古語辞典などによつて、「ぞんずらふ」は連用形接続、「ぞんずらふ」は連体形接続であると指導することは簡単であるが、このあたりが諸資料にどのように記述されているのかについて確認をしたい。

この部分について、注釈書ではどのようにになっているのかを確認する。まず、所謂旧大系では次のように「存候」の文字列に対して「じ」を補い「ぞんじさうらふ」としている⁴。

やがて世のみだれいできて、其沙汰なく候條、たゞ一身しんの歎なげきと存候。
(下 一〇三10)

但し、校注に、「〔良・寂・他〕存る候」と記されており、高良神社本と寂光院本他は「存る候」であることがわかる。旧体系の底本は龍谷大学図書館本であり、「存候」のみの文字列から判断したものと思われるが、当然「る」が省略された可能性も残る。

同じ覚一本系統の高野本を底本とする新大系では、次に掲げるように「ぞんずるぞんずらふ」としている⁵。

やがて世のみだれ出いでてきて、其沙汰なく候条、たゞ一身しんの嘆なげきと

存^{ぞんず}る候^{こうらふ}。

(下四九9)

所謂旧全集では、新大系と同じ底本を用いているので、「ぞんずる^{ぞんず}らふ」としている⁶。

やがて、世^よの乱^{みだれ}いできて、其沙汰^{そのさた}なく候^{こう}条、ただ一身^{なげき}の歎^{なげき}と存^{ぞんず}する候^{こう}。

(下九五15)

新全集においても同じ底本を用いているので、本文は同じである⁷。

やがて、世^よの乱^{みだれ}いできて、其沙汰^{そのさた}なく候^{こう}条、ただ一身^{なげき}の歎^{なげき}と存^{ぞんず}する候^{こう}。

(下七五15)

一方で、百二十句本系統の国立国会図書館本を底本とする古典集成では「ぞんじさうらふ」としている⁸。

やがて世の乱れ出で来て、その沙汰もなく候^{こう}ひしことども、一身^{なげき}のなげきと存^{ぞんず}じ候^{こう}。

(中二二9)

このように、注釈書においては底本によって「ぞんじさうらふ」「ぞんずるさうらふ」の二種が認められること、また「存候」の文字列からはいずれとも判断が難しいことがわかる。

では、注釈書の底本としている原本ではどのような表記になっているのかを確認する。龍谷大学本は未見であるが、新大系および新全集が底本とする覚一本系等の高野本⁹と、古典集成が底本とする百二十句本系統の国立国会図書館本¹⁰とは、それぞれ次のようになっている。

高野本

やがて世のみだれいできて其沙汰なく候^{こう}条たゞ一身^{なげき}の歎^{なげき}と存^{ぞんず}る候^{こう}。

(一一一九)

国立国会図書館本

やがて世のみだれいできてそのさたもなく候^{こう}ひし事とも一しん^{なげき}のなげきとぞんぢ候^{こう}。

(四、七三4)

高野本では、「存」字の後に「る」があり、また「候」に濁点が振られているので「ぞうらふ」であろう。また、直前の「一首なりとも御恩をかうふらうと存じて候しに」(一一二7)の「候」には濁点が無いので、異なる読み方をしていることが窺われる。それに対して国立国会図書館本では仮名表記「ぞんぢ」となっているので、連用形に接続する「さうらふ」である。では、底本以外の原本についてはどのように表記されているのかということについて、いくつかの諸本を確認する。

まず、高野本と同じく覚一本系統とされる熱田本では、次のように「存」字に「ルニ」があるので¹¹、「ぞんずるに」と読める。

熱田本¹²

聴世^{ソノ}乱出来^ナ無^{ルニ}其沙汰^{ルニ}候^ナ条只存^{ルニ}一身^ナ歎^ナ候^ナ。

(三二二6)

「ぞうらふ」は、「にさうらふ」からの転訛であるとされるので¹³、高野本などにみられる「さうらふ」の古形かと解釈できる。国立国会図書館本と同じく百二十句本系統の指導文庫本では、次に掲げるように「存候」となっているので、読みを確定することはできないが、京都府立総合資料館本では、国立国会図書館本と同様連用形となっているので、「ぞ

んじさうらふ」であろう。

斯道文庫本¹⁴

ヤカテ世ノ乱レ出来テ其沙汰ナク候シ事トモ一身ノ歎ト存候

(四五五11)

京都府立総合資料館本¹⁵

やがて世のみだれいできて、そのさたもなく候ひし事共、し
んのなげさとぞんち候。

(三五九8)

その他の諸本¹⁶についても確認すると「存候」であるので、「さうらふ」「ぞうらふ」の別が判断できない。

小城鍋島文庫本¹⁷

ヤガテ世ノ乱レ出来テ其ノ沙汰ナク候シ事トモ一身ノ歎ト存候

(二二五下13)

平松家本¹⁸

聽世乱出来無^テ其沙汰^ナ候シ事只^シ一身ノ歎耳^ト存候

(卷七・二六〇七)

屋代本¹⁹

聽テ世ノ乱出来テ無^テ其沙汰^ナ候シ事只^シ一身ノ歎ト存候

(五四四2)

また、次の二本については別表現となっている。

鎌倉本²⁰

六

聽世ノ乱出来テ無其沙汰候条只^シ一身ノ歎ト存世静候ナハ

(三六ウ4)

竹柏園本²¹

則世ノ乱出来無^テ其沙汰^ナ候シ事只^シ一身ノ歎ト而已覺^エ候

(卷七・二一〇6)

以上、諸本の一部について確認をしたが、「存候」には「ぞんじさうらふ」「ぞんずるぞうらふ」の二通りの読みが存すること、また先に記したが「ぞうらふ」は「にさうらふ」からの転訛で、手元の国語辞典によれば²²中世以降に出現するようである。つまり、教材中の「存候」は古典文法の「ルール」に従えば連体形「ぞんずる」に動詞「さうらふ」が接続しているように見えるが、振り仮名「ぞうらふ」によって連体形接続であることがわかり、また諸本によると伝統的な「ぞんじさうらふ」も指摘できることから、中古から中世への移行が窺えるといえよう。『平家物語』に限らず、古文は日本語の絶え間ない変化の中に位置するものであり、講義「日本語の歴史」においてそのような動態を理解することができれば、教材に対する理解がより深まるのではないだろうか。

四、まとめ

本稿は、稿者にとっては講義をするに際しての「教科に関する専門的科目」を「教科及び教科の指導法に関する科目」に位置づけることを意識するための覚え書きであり、学生にとってはその意図を認識するためのものである。「はじめに」において本稿の目的を、大学における講義内容が指導場面と如何に関わるのかを検討するとしたが、教科書教材の背

後には様々な日本語の歴史的变化、変遷があることを理解して頂きたい。そうした日本語の実態を単純化或いは抽象化した結果として、例えば「ルール」としての文法がある。しかし、そのような単純化された「ルール」に基づいて実際の古文が記述されているわけではなく、実際には「ルール」に記述されない多少の例外が存することを理解しておかなければならない。

鈴木博氏は、流布本『平家物語』に動詞「死ぬ」に完了の助動詞「ぬ」が接続している用例を発見し、文法書の記述と異なることに疑問を持たれた²³。そして、『平家物語』だけではなく『今昔物語集』にも用例があるのを知り、以下のように記されている。

今まで文法を規範的なものとしてしか見ていなかったが、この問題は歴史的立場、記述式文法の立場で取り扱うべきものと悟ったのである。

(中略)

このように学校での文語文法を金科玉条的、ルールブック的に墨守することなく、歴史的に考察すべきであるのだが、当時の学校では一般にこのような注意が払われていなかったのである。(二二二頁、傍線稿者)

右の「当時」は太平洋戦争前後のこととして語られているが、現在の教育現場での文法教育はどのようになっているのであるうか。日本語は時代によって変化しており、またその変化が諸本の比較によって窺えることがある。「さうらふ」と「さうらふ」は、古語辞典に従って接続が異なるのであると説明することは容易であるが、そこには音変化や諸本に

よる異同など、様々な背景があることを講義「日本語の歴史」を通じて理解していただきたい。

- 1 片仮名文における促音表記について、小林芳規『小林芳規著作集第一巻 鎌倉時代語研究上』(汲古書院、二〇二二年八月)に、「鎌倉時代にも無表記が引続き一般的であるが、それに交って「ッ」表記が現れ始める。」(三〇一頁)とある。
- 2 新編日本古典文学全集『平家物語』(小学館、一九九四年八月)
- 3 『高野本平家物語』七(笠間書院、一九七四年一月)
- 4 日本古典文学大系『平家物語』下(岩波書店、一九六〇年一月)
- 5 新日本古典文学大系『平家物語』(岩波書店、一九九三年一月)
- 6 日本古典文学全集『平家物語』(小学館、一九七五年六月)
- 7 新編日本古典文学全集『平家物語』(小学館、一九九四年八月)
- 8 新潮日本古典集成『平家物語』(新潮社、一九八〇年四月)
- 9 『高野本平家物語』七(笠間書院、一九七四年一月)
- 10 古典文庫『平家物語 百二十句本』(一九六八年三月)
- 11 影印では「ルニ」の「ル」は裏写りで、「ニ」は「シ」であるかともみえる。
- 12 『真字熱田本平家物語』(尊経閣叢刊、一九四一年)
- 13 『古語大辞典』(小学館、一九八三年二月)「さうらふ」の項に、「断定の助動詞「なり」の連用形「に」と補助動詞「さうらふ」との融合形」とある。融合すると「さうらふ」になるということを理解するには音声学に対する理解が必要であろう。
- 14 斯道文庫古典叢刊『百二十句本平家物語』(汲古書院、一九七〇年一月)
- 15 高橋貞一校訂『平家物語 百二十句本』(思文閣、一九七三年一月)
- 16 読み本系(延慶本、四部合戦状本、長門本)についても確認をしたが、同文的箇所を見出せなかった。
- 17 『小城鍋島文庫本平家物語』(汲古書院、一九八二年五月)
- 18 京都大学文学部国語学国文学研究室編『平松家本平家物語』(清文堂、一九八八年五月)
- 19 貴重古典叢刊『屋代本平家物語』(角川書店、昭和四八年一月)

²⁰ 『鎌倉本平家物語』（汲古書院、一九七二年九月）

²¹ 天理図書館善本叢書『平家物語 竹柏園本下』（八木書店、一九七八年一月）

²² 『日本国語大辞典』第二版（小学館、二〇〇一年八月）の「ぞうろう」の項に用例として『平家物語』『謡曲』などが掲げられている。

²³ 鈴木博『日本語学叢考』（港の人、二〇〇二年四月）

本学教授